

く法然上人絵伝に描かれた高砂浦く

浄土宗の開祖法然ほうねん（一一三三〜一二一二）の行状を描いた絵巻「法然上人絵伝」（国宝）

に、高砂浦の光景が描かれています（巻三四）。舳先を並べて停泊する数艘の船と、その傍らかたわに網を乾す漁師たちの姿がみえます。

七十歳を超えた漁師と妻は、法然に懇願します。「日頃、殺生の罪を犯している自分たちが、地獄に落ちる苦しみから逃れる術すべはないだろうか。」これを聞いた法然は、「南無阿弥陀仏」と唱えれば、阿弥陀如来に救われ、極楽に生まれ変わることができると説きました。老夫婦は漁業を生業なりわいとしながらも、念仏称号を忘れず唱えたので、めでたく往生を遂げることができたということです。

さてこの場面には、働く子どもの姿も描かれています。髪が伸びたままの蓬髪ほうはつは、子ども（童わらわ）の象徴です。中世では、鬚すげを結い、烏帽子えぼしを付けるのが、一人前の男の証でした。また袖無しの短い衣と

いう服装も、漁民の子どもを表現したものとされています。

黒田日出男氏によると、中世の子どもの労働は、一人前になるための見習い労働と、老人の介護など「童」固有の労働に分類できるので、みなさんも、絵巻物全集などで子どもの働く様子を探されてはいかがでしょうか。

※法然上人絵伝は、『新修日本絵巻物全集』一四（角川書店刊、一九七七年）または『続日本絵巻大成』一〜三（中央公論社刊、一九八一年、のち『続日本の絵巻』として再刊、一九九〇年）に収められています。また詞書ことばがきは、岩波文庫（二〇〇二年）で読むことができます。なお文中に紹介した黒田日出男さんの見解は、『「絵巻」子どもの登場』（河出書房新社歴史博物館シリーズ、一九八九年）をご参照ください。

（高砂市史編さん専門委員

梶木 良夫）